The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マイノリティ表象の場としてのコミュニティ・ラジオ：ブリュッセルのオランダ語ラジオ局、FM Brussel を事例に
Author(s)	井内, 千紗
Citation	大阪大学言語文化学. 2010, 19, p. 29-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77806
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マイノリティ表象の場としてのコミュニティ・ラジオ

—ブリュッセルのオランダ語ラジオ局、FM Brussel を事例に—*

井内　千紗**

キーワード：コミュニティ・メディア、都市、マイノリティ

This paper aims to reveal a particular facet of the city of Brussels, the capital of Belgium, by examining the dilemma of community radio as a medium to represent minorities in the city. To consider this, a case study on FM Brussel is implemented from the following two approaches.

Firstly, we focus on the social background of FM Brussel, a Dutch-speaking community radio broadcasted in Brussels. Since 2004, FM Brussel has been subsidized by the Flemish government, which contributes to present the political position of Flanders rather than presenting the distinctive position of Dutch-speakers in Brussels. Much of the Dutch-speaking population in Brussels routinely captures information through media in French; thus, the choice of Dutch as a language of communication in FM Brussel is a strategic attempt to showcase the existence of the Dutch-speaking population in Brussels.

Another approach to the case example is to determine the target audience of this community radio. We analyze the audience targeted by FM Brussel and the citizens who actually participate in producing radio programs as volunteers at the radio station. There are two similarities between the targeted audience and volunteers: one is that neither are they bound with any political position nor do they have any specific interests in any language; the other finding is that they are not forced to use Dutch as a means of communication. On the other hand, there is a difference between these two. That is, although FM Brussel is a radio that orients toward Dutchification of Brussels, this goal has not been achieved as supposed. It is not mandatory for participants to communicate in Dutch. The aim is to form a multicultural environment mediated in Dutch. However, in reality, the public sphere is such that communication between different languages is possible at FM Brussel.

---

* Community Radio as a Medium to Represent Minorities:
A Case Study on FM Brussel, a Dutch-speaking Radio Station in Brussels (INOUCHI Chisa)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

From the above examinations, it can be concluded that the representation of minorities is not a straightforward process in a global city under the circumstances where anyone can be a minority. Therefore, it becomes unclear as to whose "voice" is reflected in the community. The existence of a community media as a place to represent minorities is indeed essential, but a sense of collective minority is no longer the convenient excuse to form a community within a city.

1　はじめに

ベルギーの首都、ブリュッセルには大きく分けて2つの地政学的特徴がある。一方では国際機関が数多く存在することに付随し居住する外国人や、出稼ぎ労働者に端を発する移民が集住するグローバル都市としての顔がある。他方では、言語集団間の利害対立の場という側面がある。つまり、フランス語共同体とオランダ語を公用語とするフランデレン[1]の間の対立である[2]。

このような二面性を持つ都市は言語も規模も多様なメディアで溢れており、なかでも規模の小さいコミュニティ・メディアは、他のメディアとの関係の中で常に「新しい」メディアという位置づけにある。基本的にはマス・メディアに対抗する形で存在しており、市民参加および地域密着型を柱とし、とりわけマイノリティ的立場にあると意識する集団が多様な形式で活動を行っている。今日、1970年代に西欧各地で数多く存在していた社会運動的性格を持つコミュニティ・ラジオ（自由ラジオ）はあまり見られない。しかしながら2000年前後から世界各地で新たに開局するコミュニティ・ラジオ局が増加している。例えば、近年日本では災害対策を重視したコミュニティ・ラジオ局が各地で次々と開局し、その数はすでに200を超えようとしている（『読売新聞』2008.01.14朝刊）[3]。このように特定の空間および時間の社会的状況を反映した「小さな」メディアが各地で生成されている。コミュニティ・メディアが常に「新しい」メディアであると言われ続ける所以である。

本稿はそのような「新しい」メディアの1つ、FM Brussel[4]の事例研究である。まず、

---

[1] フランデレンの公用語はオランダ語であってフランデレン語（Vlaams、フランス語読みでは「フラマン語（flamand）」）ではない。フランデレン語はオランダ語の1変種である。

[2] フランス語共同体はベルギー南部のワロニー地域およびブリュッセル首都圏地域を、フランデレンは北部のフランデレン地域およびブリュッセル首都圏地域を管轄している。なお、フランデレンは共同体と地域のレベルを統合し、フランデレン政府として行政が機能している。ベルギーにおける言語集団間の対立は統治機構の変遷と共に捉える必要があるが、本稿では詳しく触れない。

[3] 2009年6月21日現在、日本コミュニティ放送協会に登録されているラジオ局は199局ある。日本ではコミュニティ・ラジオに「コミュニティFM放送」という呼称を用いている。詳しくは日本コミュニティ放送協会ウェブサイトを参照のこと（JCBA日本コミュニティ放送協会< http://www.jcba.jp/ >）。

[4] 'Brussel' はブリュッセルのオランダ語表記である（FM Brussel ウェブサイト：FM Brussel 98.8 < http://www.fmbrussel.be/ >）。

ブリュッセルにおいてオランダ語で放送を行うFM Brusselがいかにマイノリティ表象の場と位置づけられるのかを、国家の制度的問題と関連づけて整理する。次に同局の計画書、スタッフへのインタビュー[5]ならびにボランティアへのアンケート調査[6]の回答をもとに、ターゲットとする聴衆およびボランティアとして活動する市民を比較し、FM Brusselの主体を引き出す。さらにFM Brusselの活動主体がブリュッセルのオランダ語化という政治性とどのような関係にあるのかを探り、グローバル化の結節点である都市において、市民参加型のコミュニティ・ラジオは政治的に集合化されたマイノリティを表象するには至っていない実情を明らかにする。

2　オランダ語でブリュッセルの情報を発信するということの意味

FM Brusselは2000年、エラスムス・ブリュッセル高等専門学校（Erasmushogeschool Brussel）にあるラジオ専科の学生と教師による学生ラジオとして開局した。当初から局運営に携わってきたヴェルベルト氏によると、FM Brusselが開局に至ったのは、ブリュッセルにオランダ語のラジオ局がないという意識と、学校で習得した技術を実践する場を求めた結果によるものであったと言う。その活動が次第にオランダ語話者の間で認知され、2004年、転機をむかえる。フランデレン政府から助成を受けることになったのである。それにより、3つの点でこのラジオ局の性質は大きく変わった。まず、同局を支えるスタッフのプロフェッショナル化が挙げられる。フランデレン政府の助成を受けるにあたり、FM Brusselはプロジェクトを拡大させる必要性から業界人を中心にした組織へと転換するという選択肢をとった（“De Standaard”紙 2004.02.18）。第2に、FM Brusselは政府の助成を受けるばかりでなく、放送範囲の拡大を実現した（ibid.）。現在、FM Brusselは商業ラジオ局に匹敵する放送範囲を有している[7]。そして最後に注目すべき変化として、活動拠点が移動したという点が挙げられる。2004年を境にFM Brusselは、かつて国営放送局の建物であり、今はリノベーションされたフラジェイと

---

[5] インタビューは2007年11月、4回に分けて行った。イェルーン・ロップ氏（局長）、ブルーノ・オプデベーク氏（FM Brussel DJ、TV Brusselパーソナリティ、ボランティアコーディネーター）、クーン・ヴェルベルト氏（マネージャー）そしてポーリーヌ・ルメール氏（マーケティング、広報）からインフォーマントとして協力を得た。インタビューは基本的には1問1答形式をとったが、話の流れで質問は適宜変更した。

[6] アンケート調査は2008年9月から10月にかけて行った。アンケートの質問は英語で行ったが、回答はフランス語、オランダ語でも受け付けた。アンケートは自由回答形式で、職業、ボランティアをするに至った動機、FM Brusselの良い点・悪い点、問題点の指摘、FM Brusselに対する思いを中心に問うた。回答のあった非学生ボランティア13名の見解を本研究では参考にしている。なお、アンケート回答を引用する際は引用部分の後に（年齢・性別）を記載する。

[7] フランデレンで登録されているラジオ局のリストはフランデレンメディア監督機関（Vlaamse Regulator voor de Media）ウェブサイトで確認できる（Vlaamse Regulator voor de Media< http://www.vlaamseregulatormedia.be/>）。

呼ばれる文化施設[8]に拠点を置いている。ここには同局に加え、TV Brussel（テレビ局）、Brussel Deze Week（新聞社）およびbrusselnieuws（インターネット）のオランダ語による各種メディアの拠点がある。いずれもフランデレン政府の助成を受け、当該政府によってブリュッセルのフランデレン人向けのメディアネットワークと位置づけられている（"De Standaard"紙 2006.01.31）。フランデレン政府がオランダ語で活動を行うブリュッセルのメディアに対し、包括的かつ優遇的な措置をとっていることがうかがえる。

フランデレン政府はなぜブリュッセルのオランダ語メディアを支援する必要があるのだろうか。この疑問に答えるため、ブリュッセルにおけるオランダ語話者の立場を取り巻く問題を、国家制度との関係から整理する必要がある。

前世紀の段階的な国家再編を経て、現在ベルギーは地域別単一言語主義を柱とする多言語国家を保持している。そのなかで、ブリュッセルは例外的にフランス語とオランダ語が同等の法的権限を有する二言語地域となっている。とは言うものの、ブリュッセル人口の8、9割がフランス語を日常的に使用していると言われ、オランダ語母語話者であっても公の場ではあえてフランス語を話すものもめずらしくない。このことを懸念し、フランデレン政府はブリュッセルを文化政策の重要な対象とし、オランダ語使用の促進に益するような非営利組織を積極的に支援しているのである。

また、ブリュッセルは国家の「中心」でありながら、ベルギー国家再編の負の産物と呼ばれ（Govaert, 1998）、フランス語共同体とフランデレンという言語集団間の利害対立の場となっている。つまり、フランス語話者にとって、ブリュッセル郊外、つまり隣接するフランデレン地域（＝オランダ語圏）に居住するフランス語話者はマイノリティであり、個人の言語の自由は束縛されるべきではないと主張する一方、フランデレン政府にとっては、ブリュッセルのオランダ語話者こそがマイノリティであり、集団の権利は保障されなければならないと対抗する（梶田, 1988: 220）。このように、ブリュッセルはフランス語共同体、フランデレン政府がそれぞれ自らを「マイノリティ」と位置づけることで問題化されている。そしてこの問題はブリュッセルとフランデレンの境界地帯、すなわちブリュッセルの郊外にあたるラント（Rand）[9]において顕著である。

FM Brusselでもこの都市郊外への関心は高く、度々ニュースとなっている。例えば、2008年6月21日にはオーヴェレイセ（Overijse）と呼ばれるラントの1自治体に居住する市民へのインタビューが放送された[10]。インタビューはオーヴェレイセにおけるフランス語がテーマとなっている。リポーターはオランダ語話者である市民に対し、ブ

---

8) 原語表記はFlagey。リノベーションの経緯については井内（2008）を参照のこと。
9) フランス語使用に便宜措置をとるブリュッセル周辺の19の自治体（Gemeente）をフランデレンは「ラント（Rand＝周辺）」と呼ぶ。
10) スクリプトは井内（2008）、APPENDIXに掲載している。

リュッセルから移住して来るフランス語話者のためにフランス語を使用しようとしないことについて意見を求めている。小売店を営む市民は、フランス語使用者の存在は「問題」であり、フランス語話者がオランダ語で生活することを「改善」と認識している。インタビューではフランス語話者は完全に他者化されているのである。すなわち、オーヴェレイセは都市の延長線上にある郊外というよりもむしろブリュッセルとは区別して捉えられており、フランデレン政府の視座が直接的に明示されている。ブリュッセルのオランダ語話者のためのコミュニティ・ラジオはフランデレン政府の立場と同一化されていると言える。

また、FM Brussel はブリュッセルの文化多様性を尊重する一面も持ち合わせている。例えば週末午後にはブリュッセル在住の移民コミュニティや異文化を紹介する番組（FM World）を放送している。ここではブリュッセルのオランダ語話者というよりもベルギー人が非ベルギー人や外国の文化を知るという視点で番組が進行する。国家制度の枠組みと都市の文化多様性が FM Brussel には反映されているものの、ブリュッセルのオランダ語話者ならではの言説は表出しない。

ブリュッセルのオランダ語話者特有のアイデンティティが見えにくいという現況は、ブリュッセルという都市の存在自体がどこまで言語集団を規定することができるのか、という問題を喚起し、言語を基軸とする現在のベルギー国家制度の限界を浮き彫りにする。例えばフランデレン政府の政策がターゲットとする集団は、オランダ語話者とフランデレン共同体[11]のインフラやサービスを利用する者、そして何らかの手段でこの共同体とのつながりを感じているあるいは関係している者である。とすると、ブリュッセルの住民ほぼ全員がターゲットとなる。このような集団はもはや言語集団あるいは言語共同体とは呼べない（Janssens, 2008: 2）。

以上、ブリュッセルのオランダ語話者がフランデレン政府により重視される一方、そのカテゴリー自体を区別することが困難である状況を見てきた。では、ブリュッセルであえてオランダ語で放送を行う FM Brussel は、ターゲットとなる聴衆をいかに特定しているのか。さらに、同局に番組制作者として関わる市民はどのようにコミュニティの活動にアクセスしているのだろうか。

3　ターゲットとする聴衆とボランティア

コミュニティ・ラジオは文字通り、特定のコミュニティに向け情報を発信するラジオ局である。しかし同時に、コミュニティはそのメディアによって創り出されるものでも

[11] フランデレン「共同体」という言語共同体の区分ではオランダ語を公用語に含むブリュッセル地域も管轄下となる。

ある。マス・メディアの空間においては一方的に受け手と位置づけられる市民の能動性が、あるアイデンティティを構築する。つまり主体的構築を強調するコミュニティ生成がコミュニティ・ラジオ（あるいはコミュニティ・メディア）の特徴であると言える（Carpentier et al., 2003: 54）。FM Brussel の場合、放送言語をオランダ語に限定することにより、コミュニティの成員は強い言語イデオロギーに支配されるはずである。本節では FM Brussel が誰をターゲットにし、また誰がどのように番組制作に参加しているのかを具体的に見ることで、同局が誰のためのコミュニティ・ラジオなのかを導き出す。

FM Brussel が 2005 年に作成した『5 カ年計画書（*Vijf-jarenplan ontwerp*）』によると、ターゲットとする聴衆は次の 3 グループに分類される。まず中核となるのがブリュッセル在住のフランデレン人（Vlaamse Brusselbewoner）である。第 2 のグループはブリュッセルで日常活動を行うフランデレン人であり、例えばフランデレン地域からブリュッセルへ通勤あるいは通学する者に該当する。このグループにとってブリュッセルは「活力に満ちて国際的な」都市である反面「陰気で危険な」都市でもある（FM Brussel, 2005:2）。以上の 2 グループに加え、ブリュッセルの他言語話者もターゲットに含まれる。同局はオランダ語を習得した非オランダ語母語話者が FM Brussel の活動に関わることを歓迎しており、彼らが「新フランデレン人（de nieuwe Vlaming）」となるばかりでなく、FM Brussel が他の文化共同体に開放的になる機会をもたらすと期待している（ibid.: 3）。

いずれにしても FM Brussel はオランダ語を媒介要素とした「コミュニティ形成」に努めていると言える。ここでいうオランダ語とはブリュッセルで生まれ育った「ブリュッセル人（Brusselaar）」の話すオランダ語の変種ではなく、19 世紀以降続いてきたフランデレン運動の結果、フランス語と同等の法的地位を得た標準オランダ語を指す。そして FM Brussel の聴衆は、媒介言語としてこのオランダ語を選択した者の集合体となる。新たなブリュッセルのオランダ語話者コミュニティが創造もしくは想像されようとしているということがこの計画書から読み取れる。

また、ターゲットの地理的領域がブリュッセルにとどまらず、ブリュッセル周辺のフランデレン地域、ラントにあることも見過ごせない。フランデレン地域から見ると、ラントは同地域、すなわちオランダ語圏の一部であるため二言語地域のブリュッセルとは区別されるのだが、ブリュッセルのラジオ局 FM Brussel から見れば、都市圏域の実質的拡大と切り離せない地区であるため、都市と連続して捉えられることになる。

以上、FM Brussel がターゲットとする聴衆を見てきた。このターゲットとする聴衆のなかにはボランティアとして番組制作に参加する者もいる。送り手と受け手の相互作用はコミュニティ・メディアが重視する理念の 1 つであり、その実践はコミュニティを映し出す鏡となる。

FM Brussel ではおよそ 80 名のボランティアが番組制作に関わっている（2008 年 10 月時点）。ボランティアとして活動したければ誰にでも門戸は開かれており、彼らには自身で制作した番組を放送する時間が割り当てられている。しかしながら、ラジオ局側が必要としているポジションへの応募者にのみ活動の機会が与えられており、番組の枠組み自体も FM Brussel が予め用意するといった制約もある。「建前としては誰でもアクセス『権』を主張できるとはいっても、現実にはすべての人がアクセスできるわけではなく、（通常は、アクセス・チャンネルを運営する者による）取捨選択が行われざるをえない」（ベリガン , 1991: iii）というのが市民参加を促す活動の実際である。つまりボランティアは、FM Brussel 運営者の管理下にある限りにおいて「自由に」番組放送を行うことが可能なのである。

ところで、ボランティアはなぜ FM Brussel の送り手として活動を行うのだろうか。彼らがボランティアとして参加するに至る動機は、2 つに大別することができる。まず、コミュニティ・ラジオが本来有する社会運動的性格を重視する立場である。彼らは現存の放送事業者の姿勢に批判的な立場をとり、自らアクセス権を行使することにより民主的なメディア界を作り上げていこうという意志を見せている。そのような立場は例えば以下の意見に見て取れる。

> FM Brussel で私は比較的自由に活動させてもらっており、自分の番組をしたいようにさせてもらっています。このように活動できる局は他にもうあまりありません（33・男性）。

一方、FM Brussel を創作活動や趣味の場と捉えて参加に至るボランティアも数多く存在する。彼らは「私の番組をより幅広い聴衆に放送する」（27・男性、下線強調は筆者）ことを目的とし、番組を自分の作品と見なす傾向にある。さらには「自分の音楽コレクションを他の人と共有することもできる」（59・男性）といった、趣味感覚で番組制作に関わる者もいる。彼らは自分の趣味を電波に乗せ、ブリュッセル中に発信する場として FM Brussel を利用するのである。

後者のタイプのボランティアにとって、FM Brussel はアクセスの機会を与える器にすぎない。したがって、ベリガン（1991）が主張するようなマイノリティの利害やサイレント・マジョリティを代弁しようという意志が根底にあるとは言いがたい。実際、ボランティアの多くは FM Brussel 以外のコミュニティ・ラジオ、大半はフランス語系のコミュニティ・ラジオ局での経験を経て FM Brussel に参加している。つまり、ブリュッセルにおいてオランダ語で放送を行なっているという特殊性はあまり重視されていない

のである。

そもそもFM Brusselのボランティアになる条件として、オランダ語力は問われない[12]。ボランティアの中にはオランダ語を使用することなく活動に参加している者もいる。ボランティアがオランダ語でのコミュニケーションに支障があるような場合は、スタッフもフランス語や、時には英語で意思疎通を図っているのである。ただし、放送言語をオランダ語と規定することにより番組自体に以下のような制約、問題が生じている。

> (ボランティア自体はフランス語話者でも構わないが) プレゼンターはオランダ語話者でなければならない。それでも、たとえば金曜の晩のFM Weekendという番組を例にあげてみよう。番組でプレゼンターがブリュッセルにいる6人にインタビューを行うと、6人中5人はフランス語話者の人たちなんだ。だから、彼らはフランス語を話す。でもプレゼンターはそのフランス語のインタビューを通訳しない。まあ、それはいいんだよね、だってオランダ語話者はふつうバイリンガルなんだから（オプデベーク氏、下線強調は筆者)。

ブリュッセルの言語環境に鑑みると上記のような状況は「自然」なことである。インタビュアーがオランダ語で質問するのに対し、フランス語で答えているブリュッセル市民が9割に達している場合もあるというのが現状であり、このような異言語間コミュニケーションがブリュッセルの日常としてFM Brusselでは受け止められている。

以上、FM Brusselの主体が誰なのかを問うため、同局がターゲットとして掲げる聴衆像と、実際に番組制作に参加している受け手と送り手の中間的立場にあるボランティアの実態を見てきた。双方に共通しているのは、放送はオランダ語で行われるが、必ずしもフランデレンの政治的立場や利害関心を言語に結びつけようとしているわけではないという点である。また市民に対し、オランダ語の使用を強要してもいない。やはり、ブリュッセルのオランダ語話者というカテゴリーの存在自体が、言語とアイデンティティを結びつけることの限界を示している。

一方、FM Brusselがターゲットとする市民と実際に番組制作に参加している市民の間には相違点もある。すなわち、他言語話者に開放的であることの目的はブリュッセルのオランダ語化にあるものの、オランダ語話者が他の言語でのコミュニケーションも可能であることが、他言語話者のボランティアのオランダ語化を現実的に阻害している。

---

12) 今回調査した非学生のボランティアのうち、8名はオランダ語話者であると回答したのに対し、5名はフランス語話者であった。

組織内においてですら、メディアを通じてオランダ語化を図ることを実践できているとは言えない。オランダ語を媒介しての異文化交流がやはりFM Brusselの理想の姿であるのだが、実際は複数の言語でコミュニケーションが可能な公共圏が成立している。

このようなラジオ局はそもそもコミュニティ・ラジオだと言えるのであろうか。その点を問うためにも次節ではブリュッセルのオランダ語化がマイノリティ表象とどのような影響関係にあるのかを見ていきたい。

4　想像されるブリュッセルのオランダ語化

コミュニティ・ラジオには様々な形態があるが、従来共通していたのは集合化されたマイノリティ意識である。そして社会的にマイノリティ的立場にある集団を表象する場として、市民の手により「マス」を対象としないメディアが活用されてきた。しかしながら「新しい」メディア、FM Brusselに関しては、誰のためのコミュニティ・ラジオなのかという面が見えにくい。なぜならメディアで表象されるブリュッセルのオランダ語話者という言語集団は、アンダーソン（2003）の提示するような想像上の集合体、あるいはコミュニティでしかないからだ。

コミュニティという概念は伝統的には地理的側面と共通利害の相関から立ち現れるとされてきた。しかしながら、グローバル化の結節点である都市において、コミュニティは開放的であり流動的にならざるをえない。コミュニティは変化の役割を担うのである（デランティ，2003: 67）。そのような流動性の中で固定的なマイノリティを捉えることの困難さがFM Brusselの聴衆像とボランティアの意識のずれを見ると明らかである。すなわち、オランダ語を媒介要素とするコミュニティが聴衆像により「想像」されているのだが、コミュニティを実際に「創造」している主体には、FM Brusselの番組制作に参加するボランティアも含まれる。彼らの活動において、オランダ語で放送することは重視されていない。

町村（1997）はマイノリティ・メディアが「エスニック」な領域へと優先的に結び付けられ、しばしばその領域でしか理解されなくなる構造を指摘している。マイノリティ表象のメディアである限り、その影響力は限られた範囲にとどまらざるを得ないのである（町村，1997: 140）。この問題を超越したところに今日ブリュッセルにおいてオランダ語で放送を行うコミュニティ・ラジオはあると言える。確かにFM Brusselはブリュッセルのオランダ語話者ならではの言説というよりもむしろ、フランデレンを表象した立場を再生産するに終始している。ブリュッセルのオランダ語話者は、フランデレン政府から助成を受けているという事実からも明らかなとおり、公的権力により改めて再生産されたマイノリティなのである。

一方、ブリュッセルは、エスニシティとメディアの関係を二言語主義という特殊な制度的背景とともに考慮しなければならない。FM Brussel に関して言えば、国家の枠にとどまらず、様々な次元の影響を受けることで文化多様性が維持されているとしても、フランデレンの言説が言語と連結して干渉している。やはりフランデレンを通してしかマイノリティは表象されないというジレンマが FM Brussel にはある。しかしながら、フランデレンというエスニシティはむしろ敬遠される。なぜならそのような市民参加型活動はブリュッセル市民に「あまりにも低い好感度」(29・男性) を与えてしまうからだ。

それゆえ FM Brussel はオランダ語話者による、オランダ語話者のためのラジオ局なのではなく、他言語話者にも開かれた都市のラジオを目指している。このような寛容さが通用するのも「オランダ語話者はふつうバイリンガルである」という前提があるからである。コミュニティが開放的であるためにエリート主義的な文脈が働いていると言える。

以上のようなグローバル都市の文脈のなかでオランダ語化という現象が作り出されている。このオランダ語化は 1830 年の国家独立当初からフランデレンの懸念事項であったブリュッセルのフランス語化に対抗するものではない。すなわち、ブリュッセルにおいてフランス語話者がマジョリティであるという事実に対するマイノリティとしてのオランダ語話者という図式はあまり重視されていない。なぜなら「ブリュッセルでは誰もがどこかでマイノリティとなっている」(De Pauw, 2009) からである。したがって、ブリュッセルのオランダ語話者のためのコミュニティ・ラジオは、マイノリティ的立場にある言語の立場を保護しようというよりもむしろ、言語使用を促進させようという働きかける立場にある。

5　おわりに

以上、FM Brussel を事例に、マイノリティ表象の場としてのコミュニティ・メディアを通してブリュッセルという都市を見てきた。今日、ブリュッセルにおいて、単に言語集団を根拠にコミュニティを想像もしくは創造することは困難であり、地域、共同体、国家、各国際機関、そしてグローバルな枠組みという、重層的な要素が新しいコミュニティ形成に影響を与えている。したがって、FM Brussel がオランダ語を使用言語とするマイノリティ表象のメディアとして存在したとしても、この表象の目的は公用語でありながらブリュッセルではマイノリティ的立場にあるオランダ語の保護ではなく、むしろブリュッセルにおけるオランダ語促進、すなわち「オランダ語化」を志向する活動となっている。誰もがマイノリティでありうるグローバル都市においてマイノリティ表象は矛盾を孕んでおり、誰の「声」がコミュニティを映し出しているのかが見えにくい。

確かにマイノリティ表象の場としてコミュニティ・メディアの存在は重要なのであるが、集合的マイノリティ意識がコミュニティ形成の口実とは言い切れなくなってきているという現実が見て取れる。FM Brussel はこのような新しいメディアのジレンマを抱え込んだ都市のコミュニティ・メディアであると言える。

参照文献・資料

Carpentier, Nico et al. (2003) "Community media: Muting the democratic media discourse?," *Journal of Media and Cultural Studies*, 17 (1), Continuum. pp.51-68.

De Pauw, Brigitte (2009) "Het Brussel van mijn dromen (2): 'Netter, groener en veiliger'," *brusselnieuws*, 2009.08.18 <http://www.brusselnieuws.be/artikels/ politiek/het-brussel-van-mijn-dromen-netter-groener-en-veiliger/> [2009/08/20].

FM Brussel vzw (2005) *Vijf-jarenplan ontwerp*.

Govaert, Serge (1998) "A Brussels Identity? A Speculative Interpretation," Deprez, Kas, and Vos, Louis (eds.) *Nationalism in Belgium: shifting identities, 1780-1995*, Macmillan. pp.229-239.

Janssens, Rudi (2008) "Language use in Brussels and the position of Dutch. Some recent findings," *Brussels Studies*, Issue 13, 7 January 2008 <www.brusselsstudies.be> [2008/06/24].

アンダーソン，ベネディクト（著）. 白石さや・白石隆（訳）(2003)『増補　想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版（Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, Revised Edition*, Verso Editions).

井内千紗（2008）「多言語社会におけるメディアのネットワーク化の可能性―ブリュッセルのオランダ語コミュニティ・ラジオの行方―」修士学位論文，大阪大学大学院言語文化研究科 .

梶田孝道（1988）「言語紛争の政治化―ベルギーの＜言語地域＞をめぐって」，宮島喬・梶田孝道（編）『現代ヨーロッパの地域と国家―変容する＜中心 - 周辺＞問題への視角』有信堂 . pp.196-229.

デランティ，ジェラード（著）. 山之内靖・伊藤茂（訳）(2006)『コミュニティ：グローバル化と社会理論の変容』NTT 出版（Delanty, Gerard (2003) *COMMUNITY*, Routledge).

ベリガン，フランシス，J.（編）. 鶴木真（監訳）(1991)『アクセス論：その歴史的発生の背景』慶応通信（Berrigan, Frances, J. (ed.) (1977) *ACCESS: Some Western*

Models of Community Media, UNESCO).

町村敬志（1997）「エスニック・メディアのジレンマ―ロス・アンジェルス日本系メディアを事例に―」，奥田道大（編）『都市エスニシティの社会学：民族 / 文化 / 共生の意味を問う』ミネルヴァ書房 . pp. 123-142.